

スイス・ロマンシュ語における言語接触の諸問題 — いわゆる「V/2 語順」について —

富盛 伸夫
TOMIMORI Nobuo

1. 序

1.1. 本論⁽¹⁾は、スイス連邦共和国の公用語・国語のひとつ、レト・ロマンス語系スイス・ロマンシュ語(以下、ロマンシュ語、言語人口約 35,000 人⁽²⁾)の語順について、筆者の調査した若干の言語資料をもとに、その類型論的特質をゲルマン系言語との接触・干渉という観点を加えつつ再検討することを目的とする。その上で、従来の研究にはあまり採られてこなかった研究上の新たな方法論的視点を示唆することも展望の内に含めたい。

ロマンシュ語は、早くは Whorf (1939) により SAE (Standard Average European) のグループに属する言語群のひとつに含められ、最近日本では主語拘束(明示の義務化)との関連から語順を類型論的に論じた松本克己(1991, 2006)においてロマンシュ語も「北西ヨーロッパ言語連合」の一員としてその特異性が強調されている。松本は Perlmutter (1971) や Haiman (1974) らの先行研究を受けて、ロマンス諸語の中ではフランス語とともに「Type A 言語」あるいは non-pro-drop 言語の主要メンバーとして位置づけている。以下では、ゲルマン系言語との言語接触が引き起こしたとされるロマンシュ語文の語順について、言語使用者の意識と規範性、多様なテキストの特質をもつ言語資料体にもみる語順現象の観察、ロマンシュ語の統語類型論上の特徴を抽出し、最後に、言語接触現象の研究に方法論として発話の情報伝達機能的分析を活用する可能性について考察する。

1.2. ロマンシュ語の形成と言語的特質は、ゲルマン系言語との接触が大きな成立要因となったとされる。ゲルマン民族(主にアラマン民族等)のアルプス地帯への「侵入」と定住は 4 世紀からすでに始まる。ルネッサンス期には聖書翻訳者 Jachem Bifrun (1506-1578) らに代表されるような、民族固有の言語としてのロマンシュ語に対する自覚とゲルマン語からの距離感と反発意識が生まれ、文章語の形成と創作活動が積極的に始まる。19 世紀後半の産業革命後、特に鉄道の発達に伴ってドイツ語圏との経済・文化の交流が深まり、ドイツ語からの直接・間接の影響が一層強まる。前世紀の大戦間にドイツ語・イタリア語に対する独自意識の高揚がみられ 1938 年国民投票によりロマンシュ語が第 4 番目の国語として制定されたことにより、ロマンシュ語の純化運動も盛んになる。1996 年、国民投票によりスイスの公用語として認定されるとともに、統一文章語 Rumantsch Grischun の整備と啓蒙が進みつつある。現在 Lia Rumantscha (ロマンシュ語言語文化振興のための財団) が中核組織としてはたらき、一定の言語政策的な効果の反面、人工的規範への

準拠・拘束が強まりつつある。現代では、時代の要請として新語形成やドイツ語からの借用は不可避であり、母語である地域方言での言語能力が弱まる危惧もある。

- 1.3. ロマンシュ語領域を含めロマンス諸語とゲルマン諸民族の言語との接点については、詳細な先行研究を紹介した Holtus, G. et al., (1989) および Holtus, G. et al., (1998) を、語彙面での接触と新語形成・借用については、富盛伸夫 (1989, 2004) を、また、統語論については、Weinreich (1953, 38-) の観察例を参照されたい。

2. ロマンシュ語のいわゆる「V/2 語順」について

- 2.1. レト・ロマンス語の語順一般について一言でいえば、概ね類型論的に operand – operator タイプの特徴をもち、文構成の代表的な語順は、次の例にみられるとおり S-V-O で、定動詞第 2 位置 (以下、V/2) 型である。(例文中、主語はイタリック体、動詞は太字部分で示す。以下同じ。)

(1) *Nus legiaivans gugent l'istorgia da Robinson da Svizra.*

「私たちは、好んでスイスのロビンソンの物語を読む」

ロマンシュ語における V/2 語順とそれに関与する形態統語的特徴を Haiman-Beninca (1992) に従うと、以下の点に要約できる。小論では、他の句構成などの語順は割愛する。

- (a) 主文の語順が、V/2 を示すこと。第 1 位置に主語以外の要素 (多くの場合トピックなど) がたつとき、第 2 位置に動詞 (句) を置き、V/3 を避ける。(cf: Wackernagel の法則)
- (b) 主語人称代名詞の明示。および第 1 位置のスロットを埋めるためのダミーの主語を必要としていること。
cf: 仏、独、英、北イタリア諸語など。共通イタリア語はこの特徴を持たない、とされる。
- (c) 倒置語順での主語人称代名詞の接辞的性格。解釈によっては「二重主語」の使用となる。
- (d) 動詞と主語との性・数の一致が、特に倒置の語順 (VS) では緩やかである。

- 2.2. 現代ロマンシュ語の代表的な文法書は多少とも規範的であるが、その中で記述的な姿勢をもつ Ganzoni (1977, 213-) は、V/2 語順以外の倒置文の出現するケースを指摘している。

(2) *Tuorna' l Reto ?* V/1

「レト (人名) は戻ってくるのですか？」 cf (仏) *Tourne-t-il, Reto ?*

(3) *Zieva avoir do da maglier a sieus chauns, Gian as mettet a durmir.* V/3

「自分の犬たちに食べ物を与えた後に、ジャンは眠りについた」

(2) は倒置により動詞が第 1 位置に上がった、いわば有標な (marked) 語順で、SAE 言語であるドイツ語、フランス語、英語等と同様、疑問文を形成する文法手段となっている。ここで、動詞の接辞となって主語代名詞 *el* が 'l となって *Tuorna* に付き、さらに名詞主語が後に続いている二

重主語文であることに注意しよう。(3)の文のタイプは、文脈や場面にもよるが、多くの場合、冒頭の語句がトピック化されていると判断できるケースが多い。また、文の核から外して左方に外置すれば $X^T, S-V-X$ であり、動詞第2位置の文とされる。

2.3. ロマンシュ語の語順に関する文法学者・言語使用者の意識は、一致して V/2 語順、そしてそれを確保する手段としての倒置構文の自然さを強調する。エンガディン地方ロマンシュ語の文法を記述した Ganzoni (1977, 212-) は、文頭に情動的に強調された統語成分を置く文において倒置をとる構文について、「我々にとって倒置が生きた言語の一部をなしているということが重要である。倒置を行わない文は、しばしばぶしつけで、人工的で、誤っているように思える。...(倒置構文がドイツ語によく似ているが) だからといって、倒置がドイツ語からきているということではない。」⁽⁹⁾と付記している。

また、エンガディン地方ロマンシュ語の擁護のために尽力した Arquint (1975, 86-87) は、1970年に言語委員会が V/3 を容認する方向を打ちだしたことに對し猛烈な反発をしている。(主語成分はイタリック体、太字は動詞部分、下線部は文頭の状況補語成分を示す。-a は倒置した不定主語が動詞接辞化したものである。)

- (4) Quista saira nu **vegna** a chasa massa tard. 「今晚はあまり遅くに家に帰ることはありません」
 (5) Quista saira, *eu* nu **vegn** a chasa massa tard. 「同上」

ロマンシュ語話者、少なくとも Arquint にとっては、倒置文(4) (X-V-S)の方が自然であり好ましいが、トピックが左方に分離した、ほぼ同意の非倒置文(5) ($X^T, S-V-X$)については、不自然だとしている。確かに統計的には変則的倒置文ともいえる構成で、副詞句が左方に移動した場合である。

3. 発話のテクスト的機能からみた語順の変種

3.1. 筆者はロマンシュ語文における定動詞位置の調査を、6種類の異なった発話場面のテクスト資料をとって行った。その結果は以下のようにまとめられる。小論では、エンガディン地方の方言 puter と vallader において、疑問文などを除く平叙文の単文、あるいは複文の主節における定動詞位置の調査に限定した。

(6)	V/2	V/2	V/3	V/1
	S-V-X	X-V-S	S-X-V, X-S-V	V-S-X
1) J. Bifrun 翻訳前文(論説文)	30.8%	46.1%	12.8%	0%
2) Sgraffits (刻銘文・散文)	87.3	7.9	4.8	0
3) 新聞記事 [Fögl Ladin] (時事文)	52.5	45.0	2.5	0

4) 民話[Uffer] (口語文)	58.8	38.3	2.9	0
5) 小説[Biert] (物語文)	63.6	36.4	0	0
6) Lia RumantschaのHP (解説文)	58.8	41.2	0	0

3.2. 資料 1) は 1560 年にエラスムスのギリシャ語聖書から初めてロマンシュ語に翻訳した J. Bifrun (Gartner によるリプリント版を参照, 1913) が「エンガディン地方の青年に向けて」と題して書いた前文で散文体である。正書法を含め文章語として十分に成熟していない苦労を述懐しつつ、ドイツ語に対しロマンシュ語の独自性を強く説いている興味深い文章である。ここで、V/3 のケースが 3 例認められた。

- (7) Mo bain eau hæ sprauza che quaista chiosa saia in üttel à pitschens & à gräds. (Gartner, 1913, 15)
「強く、私はこのこと (翻訳) が子供にも大人にも役に立つことを望んでいる」

Mo bain は文頭に置かれることの多い強調的な談話のつなぎ要素である。従って、文から分離した談話要素と解釈することもできるし、上記 2.2. の例 (3) の場合と同じく、動詞を限定する副詞 bain が強調のために左方に分離した非倒置文 X^T, S-V-X であると解釈することもできる。

3.3. 資料 2) は Sgraffits と呼ばれるエンガディン地方の民家の壁面に刻まれた刻銘文の語順を調査したものである。Kettner (1988) が収集した刻銘文 1080 例の内、エンガディン地方上流の puter 方言地域に限定して 380 例を選別したうえで、さらに韻文は押韻のために語順が変異するため調査の対象からはずし、散文 63 例 (16.6%) を調査した。散文の語順は 95.2% が V/2 であり、S-V-X が大部分を占めた。V/2 で倒置のケース X-V-S は 7.9% と少ない。理由として考えられることは、その多くの場合、主語が建造物についての建築・改修の由来を記すものであり、発話の主題 (同時にトピック) が目の前のもの (家など) で、かつ既知情報であるという発話の場面と情報伝達機能から要請されるからであろう。次の例のように文頭に既知情報以外のトピック (TRES L'AMUR / CUN SIEU SPIERT) が置かれ、X^T, S-V (-X) となって V/3 として認められるケースも観察される。

- (8) MINCHA VIT' / IN SIEU MIERT / AS RENOVA /
TRES L'AMUR / CUN SIEU SPIERT / TUOT AS MOUVA (Kettner, 1988, 103)
「各々のいのちは その働きの中で 新たになり、愛をとおし 魂をもって すべてが動く」

この現象は、歴史的な事実を情報伝達的に述べる刻銘文には S-V-X が圧倒的であることと鏡像関係にあるといえ、刻銘文の内容が、信仰・格言・人生訓・自然への賛美感謝などでは、既知情報から新情報への時間軸上の展開が転換し、トピック文が多用されて (つまりは S-V-X ではなくなり) 同時に韻文が表現手法として選ばれる傾向が強くなる。このため散文の数が少ない。従って、これは統語構造に内在する問題と言うより、発話のテキスト的特質、さらには発話の場の社

会・文化的要因が深く関与するのではないだろうか。

- 3.4. 資料 3) は、エンガディン地方の新聞 Fögl Ladin (1996 年 4 月 19 日の一部分、現在は廃刊) の紙面約 2000 行にみられる語順を調査したものである。2.5%の V/3 型がみられた。
- 3.5. 資料 4) は、1945 年 8 月に筆者の恩師 Leza Uffer 氏がエンガディン溪谷下流の Guarda 村で採集した民話 18 話を Uffer (1970) の記録により調査した結果である。語り手が直接聞き手に物語る発話の場に特有な特徴が語順の構造に現れており、次章で分析することとする。
- 3.6. 資料 5) は、エンガディン地方下流の町 Scuol の小説家、Cla Biert 氏のベストセラー小説 *La müdada* 『変容』の地の文にみられる語順で、直接話法の部分は調査対象としていない。(Biert, 1962)
- 3.7. 資料 6) は、統一文章ロマンシュ語で作成された Lia Rumantscha のサイトの文章 300 文を比較の参考に行った結果である。主語が文頭に位置する文が過半数で、X-V-S が 4 割強あった一方、V/2 から外れるものは 1 例もなかったことに注目してよい。言語文化の振興を目的とする言語リーダーが、この人工言語の普及のために高度な規範化の意識の下に綴った文であることが語順の定型化に反映しているといえ、社会・文化的側面を如実に語っている。

4. 情報伝達機能的視点からみた発話構造と語順

- 4.1. 以下の考察は、文構造の分析には統語レベルと論理意味レベルとを別の層としてとらえるアプローチをとる。加えて、発話者による語順の選択が情報伝達機能と発話の質との要因により決定される場合があることを明らかにしようとする。プラーグ学派が Functional Sentence Perspective の観点から「基本的」語順に対する「例外的」・「心理的語順」として取り上げたのが、新情報提示様式の統語レベルへの反映である。以下の例は Uffer (1970) の民話の語りの文から採るが、まさに聞き手に対し物語の展開に最適化した「浮き彫り付与」的な語順配置が選択されている。

(9) *Id era miss ora las binderas, ...* 「外には旗(複数)が出されていた...」(p.42, l.35)
論理構造 V P (Agent)
統語構造 *S* (*NP*⁰) *VP* (passive) *C* (*NP*) [*NP*⁰は非人称代名詞を表す]
cf (独) Viele Wochen nachdem das Urteil gefällt worden ist, (訳は Uffer 1970による)

この文ではいわゆる「ダミーの主語」(dummy subject)の使用と非人称受動構文がみられる。文頭の *Id* (中性代名詞 *i* の母音の前に現れる変異体) が縮約された表記であるが、統語レベルでは形式上のダミー主語で、動詞は受動態をとっていて、論理意味上は後続の *las binderas* が Patient である。この文では代名詞 *id* が非人称主語として立てられて、助動詞に *esser* 動詞をとった状態受動構文が構成される。ここで文脈上の新情報(レーマ)となる *las binderas* が後置されることで文

法上の支配を離れ、動詞部分 *era miss* の性・数の一致は起きていない。ここでは文の焦点が「旗」にあたっていると解釈される。この統語的特徴はロマンシュ語においてきわめて古く、ドイツ語が V/2 言語として定着したとされる 14 世紀から 15 世紀より以前、12 世紀頃とされる初期文献ですでに確認できること、を指摘しておこう。(ロマンシュ語のダミー主語と非人称受動構文については、Haiman & Benincà (1992, 382-) および富盛伸夫 (1994) の記述を参照。)

- 4.2. ロマンシュ語では不思議なことに、非人称受動構文と倒置現象が絡むと形態統語規則が不安定になる現象がある。次の例は、民話の終結部に定型として現れる構文でバリエントが数種類あり、対比すると分析の上で興味深い。

(10) *E cun que füt fat jo l'istorgia ...* 「そして、これで話はおしまい...」 (p.84, l.11)
 論理構造 X V P
 統語構造 C VP (passive) C (NP)
 cf (独) *Und damit wurde der Handel geschlichtet.* (訳は Uffer 1970 による)

民話終結部の定型には、同様な構文でダミーの主語をとるケースが多いが、この例には形式主語として機能する代名詞がない。しかも、主題であり唯一の名詞句である後続の女性名詞「話」と動詞過去分詞 *fat* の性が一致しておらず、文法上の支配関係を離れている。つまり、統語レベルでは、この文は主語無し文ということになるが、これはロマンシュ語の文法規則からはずれ、主語拘束(表層への明示の義務化)のある SEA 言語としては、これを例外とするか、Uffer 氏の採録の失敗か、あるいは、別の解釈を見いだすしかない。

そのひとつの新解釈の契機として以下の考察を加えておこう。同様の物語上の位置(つまり民話の終結部)で、同様な構文 *Ed uossa ais fini la tarabla.* (独: *Und nun ist das Märchen zu Ende.*) 「そして、今、この話はおしまい。」という文も出現するが、「物語がとうとう終わったのだ」と告げ、焦点を「話」という語にあわせて余韻をもたせるテキスト的機能を果たすことについては、変わりがない。違う点は、同じ文の第 1 位置を占めながら、副詞の *uossa* 「今」、上の文 (10) では副詞句 *cun que* 「これでもって」が入れ替わっている。この位置は、統語的には基本語順であれば何らかの主語がはいるべきスロットであるが、論理意味上のテーマである「話」が、テキスト的機能の要請で新情報あるいは焦点化の位置に「右外置」⁽⁴⁾ されたために、空になってしまったことになる。そこで、一種の定型が生まれ、時間(つまり物語の終末)を提示して、スロットという場所を埋めたといえないだろうか。

ここで重要なのは、「主語」という概念が、スロット位置を示すものにすぎない、そして、文意の内容に関わるものから自由になり、統語レベルの機能にすぎない、ということである。そうであれば、名詞・名詞句 (NP) でなくともよいわけで、*uossa* や *cun que* がその場所を、まさにダミ

一の主語の振る舞いと同じように、埋めてもよいことになる。もちろん語の意味とテキスト上の意味が加わっている以上は、全くの空でないことは、フランス語の *ça* が全く空でなく、ある程度の変動的指示性を保ちつつ主語位置を占める現象と類似していると考えてよいであろう。⁶⁹

4.3. ここでドイツ語の平行表現に触れておこう。ドイツ語では自動詞からも受動文をつくることができるが、1格主語のない受動文で主語になるべき4格目的語が存在しないため、無主語文となることがある。第1位置を埋めるのはその場合名詞・名詞句ではなく、関与者・経験者の与格、あるいは、状況補語的な副詞句でもよく、動詞は3人称単数形である。

(11) *ihm wird nicht geholfen.* 「彼には手助けがなされない」

(12) *Über das Problem ist lange diskutiert worden.* 「その問題については長時間議論された」

V/2 語順制約から倒置されるべき主語が表示されない傾向が、ロマンス語やドイツ語の特異な現象とはいええないことは、すでに先行研究でも明らかになっている。中世フランス語研究分野では、上に述べた第1位置に名詞主語が置かれ代りに、*si* (<SIC) で埋める例が認められており、V/2 語順制約という解釈がある一方で、主語の重複を避けることで省略した結果、主語の代用という解釈も成り立つ。先行研究については、Posner (1995, 221) を参照。⁶⁹

4.4. この主語位置を埋めるという統語上の要請は、さらに他の構文への展開を見せる。主語なし文の一種である次の文は、エンガディン地方の民家の壁に刻まれた刻銘文で、動詞は通常は自動詞(一項動詞)として用いられる動詞 *viver* 「生きる」である。

(13) *Cun art e cun ingian as viva be mez an, cun l'art e cul manster as viva l'an inter.*

「工夫とごまかしでは(人は)半年しか生きられない、

工夫と(まともな)仕事でなら、(人は)一年まるまる生きられる。」

論理構造 S V

統語構造 ?? VP (pronominal)

この文で動詞 *viva* の直前の *as* は、形態論的には再帰代名詞であり、前置されて代名動詞を構成する。従って、*viver* が再帰代名詞を伴う代名動詞として使用されているとも考えられるが、一般的には論理意味上からも自動詞 *viver* は再帰動詞を構成しない。しかも、この文では状況補語が文頭にトピック化されているため倒置となり、V/2 語順の文法規則に従えば主語が動詞の後に置かれるはずのところであるが、主語名詞は存在しない。文構成上のスロット位置(空の主語位置)を埋める必要から、本来的には再帰代名詞の *as* がここでは形式上のダミーとしての機能をもち、上でみたような一種の非人称主語構文となって、文の焦点を述部(動詞部分以降)に当てさせる焦点マーカ-情報機能を果たしている形態統語的要素であるとも考えられる。ここでは文の焦点

となる、「半年しか」と「一年まるまる」を対比的に新情報位置に置いて際立たせる文法的プロセスであるといえる。

小論では、この例をもってロマンシュ語の一般論的言述における不定の人間を意味する代名詞の用法であるかどうか、また、この代名詞 *as* が主語としての代替機能を持つかどうかについての判断は保留にするが、他のロマンス諸語の類似現象と対照すると興味深いであろう。

5. まとめと展望

5.1 ロマンシュ語の形成には「ゲルマン語との言語接触が要因となった」という表現自体が同語反復的といえるほど、ロマンシュ語はゲルマン語との接触がなければ存在しなかった。その言語史には構造・語彙のあらゆるレベルにおいてゲルマン語との接触による影響が絶えずあったからである。しかし、異なる言語を持つ社会集団間の接触が構造的干渉の契機になっても、必ずしも特定の変化を引き起こすとは限らない。接触の初期においてはゲルマン系諸言語の実体と、多言語併用状況の詳細が現時点では不明であるために、どのような干渉現象がありえたのか、推測以上の主張はできない。

5.2 フランス語の語順決定の歴史を分析した Posner (1995: 220-221) と先行研究に従えば、Gallo-Romance ではフランク族の侵入・定住よりかなり前からゲルマン的言語要素は浸透していた一方で、メロヴィング朝 (A.D. 482-) のフランク族は言語を支配するほど移入者の数が多くなく、また 2 言語併用期間は短かったという。この地方で決定的な影響を与えたのはむしろ Rheinland からのフランク族の移住で、古フランス語の基盤が形成されたのは、ようやくカロリング朝に入ってからである、と推論している。他方ロマンシュ語とゲルマン系言語との言語接触の領域では、スイス東部では高地ドイツ語のうちいわゆる「スイス・ドイツ語」(Schwyzerdütsch, Schwyzertütsch) の話し言葉変種との干渉が大きい。しかしながら中世初期以来の資料の乏しいこの方言群で、詳細な対照研究は困難である。そして、ロマンシュ語を含むレト・ロマンス語地域にアラマン族からゲルマン的統語特徴が及んだのは、それよりさらに遅れてのことであったと考えられる。

中世ドイツ語自体も語順が V/2 に固定せず、また、ロマンシュ語もラテン語より受け継いだ語順の選択幅の間で、SVO が有力であった。ドイツ語自体における語順の V/2 への一定化は、15 世紀になってからであるとされるならば、ロマンシュ語における、ダミーの主語の出現、非人称受動文の形成など、V/2 規則から演繹する解釈は、若干の問題があるといえる。総論的には Posner (1995) と同じく、後期ラテン語およびロマンス語と初期のゲルマン語との間にすでに類似の統語構造があったとした上で、ロマンシュ語領域ではゲルマン系言語との接触の過程で、語順の一定化や非人称受動形成、ダミーの主語の使用などが強く促された、という立場をとりたい。ここで、SEA 言語における文主語の義務化とその及ぼす統語的現象について、松本克己 (1991,

2006) は近代初期の「言語連合」的進化を重視していることを付記する。

- 5.3. 前章までの観察でみたように、ロマンシュ語語順について各種ジャンルの言語資料のコーパス内統計からは、一定の出現頻度や偏差の傾向は探ることができる。しかしながら、資料体により不均衡な偏りのある数値をみれば、表層語順の決定には、テキストの質、テキスト性、発話の条件(場、参加者、意図、状況など)が関与する、と考える方が妥当であろう。従って、様々なジャンルの文(談話・テキスト)に対応した発話の場の要因とコミュニケーション・モデルを語順決定の分析に加えるべきである。ロマンシュ語の受動態をこの視点で分析した富盛伸夫(1993, 1994)も参照されたい。具体的事実としての言語の内部構造、特に統語構造レベルでの選択条件決定プロセスの解明には、テキスト言語学的分析の観点から語順決定に関わる機能因子を研究する必要があるであろう。
- 5.4. 最後に、一般に言語接触が構造内の言語干渉への引き金となりうるにしても、干渉のプロセスと多様な様相については十分に解明されているとは言い難いことを確認したい。Weinreich(1953, 71-, 89-)、Silverstein(1976)、Kristol(1984)らが開拓的業績で明らかにしたように、その要因に社会的・文化的側面が複合的に強く関与する。英語史の分野でChaucerの作品を中心に近代英語の形成期の語順について様々なテキストを調査したEitler(2005)は、テキストのジャンルと当時の社会文化的要因との相関、とくに東からロンドンに流入する人々の動きと諸方言・レジスターの選択を分析しており、新たな研究方法への示唆をあたえる。小論の範囲を越えるが、ロマンシュ語はもとよりロマンス諸語の言語史を解析する上でも、複数言語の併用状況での社会言語学的視点を援用した資料の再調査が必須となるといえよう。

注記

- (1) 本論文は、ドイツ語やイタリア語との言語接触による干渉を調査した平成16年度文部科学省科学研究費補助金基盤研究(C)「多言語併用状況におけるスイス・ロマンシュ語統語構造の動態的研究」(2年間)による研究成果である。
- (2) ロマンシュ語の言語人口について2000年の国勢調査を元にしたLia Rumantschaの公式サイトでは、スイス全体で第1言語とした回答者は35095人としている。
- (3) Ganzoni(1977, 212-)からの筆者による抄訳。「... Cun que nun esa dit cha l'inversiu vegna dal tudas-ch. Per nus es que important cha l'inversiu fo part da la lingua vivainta. ...」
- (4) 「右外置構文」については松本克己(2006)を参照。
- (5) cf: フランス語 Il a été dansé toute la nuit ; ça a fait un grand bruit tes enfants !
- (6) 中世フランス語について豊富な資料から統計的な根拠をもとにした語順を決定する諸要因の分析は、特に今田良信(2002)に詳しい。

引用文献・資料・関連サイト一覧

- Arquint, J., (1975) "Aspets da la sintaxa rumantscha", in *Annalas* 88, Münster.
- Biert, C., (1962) *La müdada*, Thusis.
- Eitler, T., (2005) "Some dialectal, sociolectal and communicative aspects of word order variation and change in Late Middle English." in *Historical Linguistics 2003*, Copenhagen, 11-15 August 2003, edited by M. Fortescue, Amsterdam.
- Fögl Ladin, Stamparia, Samedan.
- Ganzoni, G., (1977) *Grammatica Ladina. Grammatica sistematica del rumantsch d'Engiadin'Ota, Lia Rumantscha*, Samedan.
- Gartner, Th., (1913) *DAS NEUE TESTAMENT, ERSTE RÄTOROMANISCHE ÜBERSETZUNG VON JAKOB BIFRUN, 1560*. Dresden.
- Haiman, J. (1974) *Targets and Syntactic Change*, Mouton.
- Haiman, J. and P. Benincà, (1992) *The Rhaeto-Romance Languages*, London and New York.
- Holtus, G. et al., (1989) *Lexikon der Romanistischen Linguistik (LRL)* Bd. 3, Tübingen.
- Holtus, G. et al., (1998) *Lexikon der Romanistischen Linguistik (LRL)* Bd. 7, Tübingen.
- Kettner, M., (1988) *Hausinschriften, Darstellung und Interpretation einer Alltagskultur im Engadin, im Münstertal und im oberen Albulatal*, Chur.
- Kristol, A. M., (1984) *Sprachkontakt und mehrsprachigkeit in Bivio (Graubünden) Linguistische Bestandesaufnahme in einer siebensprachigen Dorfgemeinschaft*. Bern.
- Perlmutter, D.M., (1971) *Deep and Surface Structure Constraints in Syntax*, New York.
- Posner, R. (1995) "Contact, Social Variants, Parameter setting, and Pragmatic function : an example from the history of French syntax." in *Linguistic Change under Contact Conditions* by Jacek Fisiak, (Trends in linguistics. Studies and monographs ; 81) Berlin-New York.
- Silverstein, M., (1976) "Shifters, Linguistic Categories, and Cultural Description" , in *Meaning in Anthropology*. Keith H. Basso and Henry A. Selby (eds.) Albuquerque: University of New Mexico Press.
- Uffer, Leza, (1970) *Las tarablas da Guarda, Märchen aus Guarda*, Basel.
- Weinreich, U. (1953-1974) *Languages in Contact –findings and problems–*. The Hague-Paris.
- Whorf, B. L., (1939) "The relation of habitual thought and behavior to language", in *Language, Thought, and Reality*, Cambridge, Mass.
- 今田良信 (2002) 『古フランス語における語順研究、13世紀散文を資料体とした言語の体系と変化』
溪水社。
- 富盛伸夫 (1989) , 「ロマンシュ語・エンガディン方言における新語の形成過程について - 調査ノートから - 」『吉沢典夫教授追悼論文集』, 255-265.
- 富盛伸夫 (共著) (1990) 『スイス民話集成』スイス文学研究会編, 早稲田大学出版部。
- 富盛伸夫 (1993) 「レト・ロマンス語エンガディン方言における受動態の諸問題 (I)」『東京外国語大学論集第47号』, 1-27.
- 富盛伸夫 (1994) 「レト・ロマンス語エンガディン方言における受動態の諸問題 (II)」『東京外国語大学論集第48号』, 1-19.
- 富盛伸夫 (2004) 「スイス・ロマンシュ語における新語形成と受容プロセスの研究」平成14年度～平成15年度科学研究費補助金(基盤研究(C)(2))研究成果報告書, 本文30p, 資料147p.
- 富盛伸夫 (2006) 「多言語併用状況におけるスイス・ロマンシュ語統語構造の動態的研究」平成16年度～平成17年度科学研究費補助金(基盤研究(C)(2))研究成果報告書。
- 松本克己 (1991) 「主語について」『言語研究』100, 1-41.
- 松本克己 (2006) , 『世界言語への視座』三省堂。
- ・ Lia Rumantscha (<http://www.liarumantscha.ch/>)